深浦フォーラム２０２０．１１．１　配付資料

明治の仏教
――真言宗を中心として――

末木文美士

０、概要

明治維新の際に、神仏分離や廃仏毀釈によって仏教界は大きな被害を被ったが、その中で、いち早く積極的な活動を展開したのは真宗系であった。これに対して、密教や修験は、神仏分離の打撃が大きかったこと、加持祈祷が迷信として批判されたことなどから、立ち直るのに時間を要した。その中で立ち上がったのが、円覚寺海浦義観らである。ここでは、シカゴ万国宗教会議参加など、国際的な視野を持ち、御室派・高野派の管長として指導力を発揮した土宜法龍（１８５４―１９２３）、並びに法龍と親しく交流し、独自の曼荼羅思想を展開した民間学者南方熊楠（１８６７―１９４１）を取り上げてみたい。

１、近世の仏教　Cf. 末木『近世の仏教』（吉川弘文館、２０１０）

従来の常識：近世は儒教の時代、近世仏教堕落論、近世世俗化論

新しい見方：基軸になるのは仏教、諸宗教・諸思想の交流・論争、仏教は活発に活動

単純に世俗化とは言えない

近世前期　仏教中心

近世中期　世俗化の進展、合理主義

近世後期　近世後期（19世紀前半）

平田篤胤と宗教復興・霊魂論（『新鬼神論』『霊能真柱』）、平田派神道と尊王攘夷運動

儒教の浸透　寛政異学の禁（１７９０）→昌平坂学問所、藩校の設立（↓後の中学）

危機の政治思想 水戸学派

２、明治維新と神道・仏教

親仏教（真宗）

長州　水戸学⇒吉田松陰⇒高杉晋作など　勤皇僧：月性・大洲鉄然・島地黙雷

西本願寺（勤皇）⇕東本願寺（幕府）

反仏教　復古神道系　津和野（亀井茲監、大国隆正、福羽美静）、薩摩（島津忠義）

新政府の宗教政策

（１）神道国教化　神仏分離と廃仏毀釈（１８６７）神祇官復興（１８６９）⇓神祇省（１８７１）

仏教側の反撃、欧米のキリスト教公認要求

（２）神仏合同　教部省（１８７２）大教院と教導職⇓真宗系の反対

島地黙雷

（３）信教の自由と国家神道　内務省社寺局（１８７７）⇓内務省神社局・宗教局（１９００）

明治期仏教の再検討

廃仏毀釈：仏教は被害者か？

真宗主導の明治仏教：　討幕勢力と西本願寺、神仏分離的、合理化・近代化しやすい信仰構造　反密教的、反呪術・加持祈祷、一神教化

肉食妻帯蓄髪許可（１８７２）⇓僧侶の戸籍編入

真宗の中の前近代性門主信仰

3、真言宗の近代化と土宜法龍

真言宗の二つの流れ

金剛峯寺方（本寺方）⇓古義

伝法院方（院方）⇓根来寺⇓新義　覚鑁の流れ、頼瑜によって教学完成（13世紀）

維新により大打撃：皇室との関係が切れる、迷信・呪術として批判される

その後も分裂続く：画一派と分離独立派⇓現在は、主要16派

修験道 江戸時代に二系統に限る

真言系 本山派　醍醐寺三宝院　大峰

天台系 当山派　聖護院　熊野

修験の役割：在家主義（妻帯）、定着と移動、医術と呪術

神仏分離　⇓修験禁止令（１８７２）

土宜法龍（１８５４―１９２３）

１８５４　名古屋に生れる　５才で出家　１８６９　高野山で伝法灌頂を受ける

１８７６　慶應義塾別科に学ぶ

１８９３　シカゴ万国宗教会議参加、その後、欧州・アジアを経て翌年帰国

イギリスで南方熊楠（１８６７―１９４１）と出会う

１９０６　真言宗御室派管長　１９０８　古義真言宗各派連合総裁

１９１２　三教会同参加　１９２０　高野派管長

シカゴ万国博覧会（１８９３）日本館＝鳳凰殿、岡倉天心（１８６３―１９１３）のアイディア

近代的でありつつ日本風

時代状況　１８８９　大日本帝国憲法、１８９４―95 日清戦争、１９０４―05 日露戦争

シカゴ万国宗教会議（１８９３）

万博に併設の世界会議の一つ

万国宗教会議委員会：シカゴ市内の牧師とラビ、議長 John Henry Barrows

cf. 森孝一「シカゴ万国宗教会議：１８９３年」１９９０

日本の参加者　柴田礼一（実行教）、蘆津実全（天台宗）、釈宗演（臨済宗）、

土宜法龍（真言宗）、八淵蟠龍（真宗本願寺派）、平井金三（アメリカ在住仏教）、

小崎弘道（プロテスタント）、岸本能武太（留学中プロテスタント）

通訳　野口善四郎、野村洋三

日本仏教者の発表

釈「ブッダが教えた因果の法則」、土宜「仏教が日本で何をなしたか」、八淵「仏教」、

蘆津「ブッダ」

・いずれも宗派を入れず、仏教全般の立場を主張

・インドのヴィヴェーカーナンダが注目される中、日本の仏教者は珍しがられても、それほどの感銘は与えず⇓日本仏教が注目されるのは鈴木大拙

土宜法龍の発表

「日本仏教各宗略史」「今や日本仏教は改革を要するの時也。…日本仏教は変じて全世界の仏教とならん」

「日本の仏教」「苟も宗教と言へる宗教は皆一味にして、今や我が宗教大会は古来始めて、此の尊ぶべき事実を証明せんとするものなれば」

4、土宜法龍と南方熊楠の交流

往復書簡『南方熊楠・土宜法龍往復書簡』（八坂書店、１９９０）

『高山寺蔵南方熊楠書翰』（藤原書店、２０１０）

熊楠⇒法龍 約74通　法龍⇒熊楠 約79通

南方熊楠顕彰館に見本国のものを含めて多く現存。ジャパン・サーチで閲覧可能

南方熊楠（１８６７―１９４１）

１８６７　和歌山に生れる　１８８６　大学予備門中退、アメリカにわたる

１８９２　ロンドンに移る。主に大英博物館で研究。孫文と交流

１９００　帰国。１９０４　田辺に移る、１９０９　神社合祀反対運動、１９２９　天皇に進講

法龍と熊楠の交流

１８９３．10．30　ロンドン中井氏方にて初めて会う。大英博物館を案内

11．４　法龍はパリに戻る。その後、書簡往復

パリからの書簡

書籍についてのアドバイスを求め、購入依頼、インド宗教、チベットへの関心など、

チベット旅行を企画　cf．川口慧海のチベット紀行（１９００～１９０２）

「貴下は小生の大善友なり」（第18書簡）

法龍の仏教観・密教観 総合的・統合的

「秘密教の研究」西蔵密教、印度教の瑜伽派（ヨーガ派）

「真言宗話の一滴」「真言宗は横統仏教と称して、何宗にても差別なく…是等の宗派 の人々を尽く摂めて、咸な此の真言宗の御利益を戴かすのである」

国家と仏教「三教会同の状況を報告してその決議に及ぶ」

「彼の維新の際、明治政府の所為は実に仏教の敵と云はねばならぬ。…宮中後七日御修法を始め、大元帥御修法より諸寺諸山の勅会を停止し、門跡号を廃し、法親王を還俗なさしめ、廃仏毀釈の出来るだけはしたものである」

＊後七日御修法の復活（１８８３）

三教会同決議案（１９１２）

1、吾等は各々其の教義を発揮し、皇運を扶翼し、益々国民道徳の振興を図らんことを期す

2、吾等は当局者が宗教を尊重し、政治、宗教、教育の間を融和し、国運の伸張に資せられんことを期す

＊諸宗教の合同とともに、国家と宗教の協力

＊法龍は非常に積極的

南方マンダラ